

美術科教育学会通信 NO.37

2000年5月25日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室
TEL: 0734-57-7359,7358 (長谷川・永守研直通) FAX: 0734-57-7509,7508 (同)
通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX: 0742-27-9223 (宇田研直通)

第22回 美術科教育学会 兵庫大会報告

学会兵庫大会を終えて

福本謹一 (兵庫教育大学)

第22回美術科教育学会兵庫大会は予定通り平成12(2000)年3月27日(月)より29日(水)まで開催され、盛況のうちに閉会することができました。

研究発表の件数は最終的に60件、大会参加受付け総数は、186名となり、本学の学部・院生スタッフ30名を加えて、220名弱という予想をはるかに上回る結果となり、会員並びに賛助会員の皆様のご協力に対して実行委員一同、心からお礼を申し上げる次第であります。何しろ、一月末の事前申込締め切り時では、58名程しか受け付けることができず、学会運営に関して支障をきたすのではないかと心配し

ておりましたので、喜ばしい限りです。

この兵庫大会のメインテーマは、「越境の時代」であり、今日的な教育の課題に対峙し、美術科教育のあり方

を見定めることをめざしたわけですが、第1日目には、さいとうたかを氏の記念講演があり、氏の「劇画」への思いのみならず、男性と女性の関わりなども含め楽しい語らいをしていただきました。同日のシンポジウムI「美術は子どもたちに何を伝えられるのか」では、神戸大学の東山明先生のコーディネートのもとに新しいミレニアムに向けての子どもと美術のかかわりをパネリストの3氏に語っていただき、生涯教育を見据えた提言をいただきました。

また、第2日目には、シンポジウムII「実践学の構築 現場からの視座(美術教育における校種間の連携に向けて)」をもち、コーディネ



挨拶する花篤代表理事



シンポジウム 「美術は子どもに何を伝えられるか」(左から島本、中村、椿氏)



同(左から椿、東山氏)

ネーターに文部省教科調査官の板良敷敏氏を迎えてパネリスト3氏とともに校種間の連携についての問題点の検討をしていただき貴重な示唆をえることができました。

これら学的検討の他に総会では、学会の財政難の打開策として会費値上げが避けられないことが確認され、会員募集などと併せて学会の支援策を練ることが不可欠であるとの共通認識がなされました。

本大会におきましては、交通の便も悪く、宿泊された方々には多大のご不便をおかけしました点、お許しを請う次第であります。兵庫大会開催にあたって学会員諸氏並びにご支援をいただきました皆様に対しまして重ねて御礼申し上げます。最後になりますが、第23回大会を開催予定の筑波大学関係者の皆様にエールを送りたいと思います。



シンポジウム 「美術における校種間の連携について」



次期開催大学を代表して岡崎氏の挨拶



劇画家さいとうたかを氏による記念講演



挨拶する辻田大会実行委員長

'99年度学会総会について

- 議題・報告事項、会費額改定の趣旨 -

事務局代表 長谷川 哲哉

毎年一回学会大会に併せて開かれる総会が、今年は兵庫教育大学を会場にして3月29日(11時45分～12時45分)に開催されましたので、ここに簡単な報告を致します。

議 題

1. 1999年度会計決算報告

これについては、別の記事「平成11年度会計報告」をご覧ください。

2. 2000年度会計予算案

従来通りの年会費6000円による予算案と改正年会費8000円による予算案とが同時に呈示され、前者によると明らかに赤字(次年度繰越金がマイナス約62万円)になることが認識され、その結果、年会費8000円による予算案が賛成多数で可決されました。

3. 第2回リサーチ・フォーラム

標記の夏季ミニ学会が、「美術批評と美術教育」をおよそのテーマにして、8月25日に東京のぺんてるビルにおいて開催する予定計画が説明され、了承されました。

4. 次期役員選挙日程と選挙管理委員の選出について

今年は役員選挙の年に当たります。およその日程として、<11月上旬に選挙通知・投票用紙発送、12月上旬に投票締め切り・開票、来年3月の総会で承認>が説明され、了承されました。選挙管理委員として委員長に浜本昌宏、委員として仲瀬律久、金子一夫、長田謙一、増田金吾の各理事が当たり、立会人は8月の理事会で決定するという理事会原案が提出され了承されました。

5. 次回大会開催大学について

次回の第22回大会の開催大学は筑波大学とする案が紹介され了承されました。また代表理事花篤實氏より、次々回以降の開催大学の決定方法を学会行事担当理事と事務局が協力して検討していく旨が説明されました。

報告事項

1. 当学会が第18期日本学術会議に登録されたこと、よって学術会議会員選挙に参加(会員候補一名・花篤實、推薦人一名・長谷川哲哉)すること。
2. 当学会より平成12年度科研費審査委員(第1段)を推薦し実際に委嘱されたこと、6月3日芸術学研連主催のシンポジウム「20世紀 芸術の境界」に長田謙一(総合司会)と長谷川哲哉(レポーター)が参加

すること。(同封の案内チラシを参照。)

3. 学会誌21号の発行・発送が完了したこと、小さなミスが2点あったが対処したこと、22号の編集日程として投稿締め切りを8月末にすること。
4. 文部省出版助成金の申請を行なったが採択されるには厳しい状況にあること。
5. 学会のホームページが充実しつつあること。

会費額改定の趣旨

本学会の会計状況が数年前より悪化をきたしてきております。そのため学会としては、これまでの学会活動や会員サービスの低下を来さない範囲で収支の均衡を保つように、事務局を中心に様々な取組みをしてみましたが、かような努力も2000年度においては限界に達することが判明してまいりました。すなわち従来通りの年会費6000円による予算案を立てれば明らかに赤字(次年度繰越金がマイナス約62万円)になることが判明した次第です。

こうした現状を来した主な原因としては、1993年度から施行された年会費6000円が7年間値上げされておらず、一方諸種の支出は漸増してきており、また会員数は微増の状態にあるという事態があります。

そこで1999年8月26日の役員会において慎重審議の結果、年会費の改正もやむなしの結論にいたり、これまでの年会費6000円を2000年度から8000円へ増額する案を次の総会にはかることを決議いたしました。これを受けて、本年の去る3月29日の学会総会において、上記の案を含む2000年度会計予算案を議題として提出いたし、審議の結果、賛成多数で可決されました。

貧すれば鈍するとも申します。つきましては会員諸氏に、かかる年会費改正の止むをえない事情をご理解いただけますようお願い致す次第です。

なお、まだ未納の方は改正会費を学会事務センターの方へ速やかにご送金いただけますよう、お願い申し上げます。

平成11年度 学会総会・会計報告

岩崎由紀夫（大阪教育大学）

去る3月29日、第22回美術科教育学会兵庫大会の第3日目の総会におきまして、平成11年度の会計決算報告並びに平成12年度会計予算案の提案を致しました。

これに先立ちまして、会計監査の伊藤弥四夫・古市憲一両先生に平成11年度の会計決算の監査をしていただきました。その結果、適正であるとのこと判断をいただきました。

また、平成12年度の会計予算案につきましては、ご審議いただいた結果、年会費6000円を8000円に値上げすることが総会で了承されました。つきましては、平成11年度の会計決算報告並びに平成12年度の予算案を紙面を借りまして報告させていただきます。

ご承知のように本学会は年会費収入そのものが財源です。特に、今年度は総会において値上げの審議・了承がありましたので、学会事務センターからの請求が大幅に遅れました。つきましては、会費納入を迅速にお願いします。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

《美術科教育学会99年度会計決算報告》

◇収入の部		単位：円	◇支出の部		単位：円
項 目	収入額		項 目	支出額	
年会費	2,997,100		大会補助金	200,000	
・正会員 6,000円×489名強			学会誌21号印刷代	2,534,123	
・賛助会員 20,000円×3社			学会誌20号郵送費	131,285	
平成11年度学会誌刊行助成金	500,132		(学会センターより、125,435円)		
学会誌21号掲載料	962,880		学会誌21号編集費	114,420	
<1件25,000円+超過頁1頁分			学会通信編集作成費	31,423	
5,000円>			学会通信郵送料	171,200	
学会誌売上金 <4,000円×9冊>	36,000		(学会センターより、164,600円)		
[20年史]売上金<1,000円×6冊>	6,000		通信・郵送料	16,452	
トータル・メディア	10,950		会議費	9,542	
その他	4,426		旅費(理事会・総務会)	83,000	
前年度繰越金	619,919		事務補助費	105,000	
合 計	5,137,407		事務費(消耗品)	9,550	
			部会補助費	115,000	
			学会史作成費	500,000	
			学会史郵送費(学会センターより発送)	180,060	
			学術協力財団賛助費	50,000	
			学術会議登録料	10,000	
			リサーチ・フォーラム関連	14,539	
			学会センター99年度会員業務費	686,616	
			学会センター上記以外の引落金	156,492	
			予備費	11,970	
			小 計	5,110,672	
			次年度繰越金	26,735	
			合 計	5,137,407	

2000年3月31日

学会本部事務局会計部 岩崎由紀夫

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 迅速に年会費の納入をしていただくこと、滞納のないこと、精力的な会員の増員の働きかけをお願いするしかありません。学会の発展を目指すためには、会計面の充実が不可欠です。ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

会員の皆様には、次の2つのお願いをしたいと思います。

- (1) 会費は、学会事務センターからの『最初の請求』の時点で「すぐに・間を置かず」センターへ支払ってください。当該年度ごとに会費納入がされないと、その年度の会費収入額の誤差が大きくなり、運営に支障を起すこととなります。
- (2) 論文投稿者は、『請求が行き次第』決まった金額を本部事務局へ支払ってください。そうしていただかないと会計年度が跨ってしまうため、会計報告に支障を起すこととなります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

《美術科教育学会2000年度会計予算案》

◇収入の部		単位: 円
項 目	収入額	
前年度繰越金	26,735	
年会費	3,500,000	
<正会員 8,000円×430名 賛助会員 20,000円×3社 >		
平成12年度学会誌刊行助成金	500,000	
学会誌22号掲載料 <1件25,000円+超過頁1頁分 5,000円>	800,000	
学会誌売上金 <4,000円×15冊>	60,000	
概要集売上金 <700円×5冊 >	3,500	
合 計	4,890,235	

◇支出の部		単位: 円
項 目	支出額	
大会補助金	200,000	
学会誌22号印刷代	2,600,000	
学会誌21号郵送費(学会センターより発送)	140,000	
学会誌22号編集費	120,000	
学会通信編集作成費	50,000	
学会通信郵送料(学会センターより発送)	180,000	
通信・郵送料	30,000	
会議費	10,000	
旅費(理事会・総務会)	120,000	
事務補助費	110,000	
事務費(消耗品)	20,000	
部会補助費	120,000	
学術協力財団賛助費	50,000	
学術会議登録料	10,000	
学会センター2000年度会員業務費	700,000	
学会センター上記以外の引落金	160,000	
予備費	30,000	
小 計	4,650,000	
次年度繰越金	240,235	
合 計	4,890,235	

2000年3月31日

学会本部事務局会計部 岩崎由紀夫

第18期日本学術会議への 団体登録と会員選出について

事務局代表 長谷川 哲哉

標記の仕事が完了しましたので、会員諸氏にお知らせしておきたく筆をとりました。

ご存知のように、日本学術会議は昭和24年より日本学術会議法により設立された総理府の特別の機関です。現在我が国には約70万人の科学者・研究者がいますが、日本学術会議は、これら研究者の内外に対する代表機関として、科学の向上を図り、行政・産業・国民生活に科学を反映浸透させることを目的として、重要事項を審議し、また研究の連絡を図るなどの諸活動を行なっています。多種の分野を代表する日本学術会議会員の数は210名で、任期は3年です。

そして今般、第18期(平成12年7月22日発足予定)会員の選出に係る学術研究団体の登録の申請を、美術科教育学会も平成11年5月に行い、日本学術会議会員推薦管理委員会による審査の結果、平成11年9月に登録が認められました。登録申請には、多種多数の書類(特に数値に関する書類)の提出が求められ、相当の苦労を要しましたので、第15、16、17期に続いて学術研究団体として認められたことは慶賀のことでした。学会員の精神的後押しのもと、事務局が学術会議担当理事の竹内博氏と緊密な連絡を取り合いながら、また前事務局の方々の協力を受けながら申請作業を進めた成果だと思えます。

登録申請する場合には、各学会の目的とする学術研究領域と関連する研究連絡委員会を届けなければなりません。美術科教育学会としては理事会の合意のもとに、第1順位に教育学研究連絡委員会を、第2順位に芸術学研究連絡委員会を届けました。その結果、日本学術会議会員の選出に際しては、当学会は

教育学研究連絡委員会に登録されました。(ただし日常の日本学術会議活動においては、当学会は、芸術学研究連絡委員会と、狭義の教育学研究連絡委員会と連合している教科教育研究連絡委員会との両方にまたがって活動していきます。)こうして、登録学術研究団体となった当学会は、2月に会員候補者として代表理事の花篤實氏を、推薦人として副代表理事の長谷川哲哉を届出、審査の結果認められました。

次いで、去る5月9日に東京六本木にある日本学術会議において、教育学研究領域の会員の選出に係る推薦人会議が開催され、長谷川も参加してきました。会員候補者数は46名、推薦人(選挙人)数は61名でした。約2時間かけて、教育学研究領域の定数の3名(210名中の3名)が選出されました。(まだ未公表とすることになっていきますので、氏名を明らかにできません。)この3名が内閣総理大臣に推薦され、任命されると、正式に日本学術会議会員となるわけです。

会員数の規模が小さい美術科教育学会は推薦人(選挙人)を1名しか出せず、そのため当学会から学術会議会員を輩出することは至難の業です。しかし、上に述べたように登録学術研究団体となったことだけでも立派な成果です。これにより向こう3年間種々の学術会議活動に参加できること、例えば科研費審査委員(第1段)の候補の届出ができること、また芸術学研連や教科教育研連の諸活動へ直接参加できることは、当学会のみならず斯学全体にたいし大きな利益をもたらすものと期待できます。

リサーチ・フォーラム2000 第2回美術科教育学会課 題研究会 に向けて

事務局 永守基樹

昨年8月に開かれた第1回リサーチ・フォーラム「美術教育における“ディシプリン(規範性)”を承けて、第2回「美術批評と鑑賞の問題 「批評」の意味と鑑賞教育の実践」が2000年8月25日(金)に開催される予定です。

リサーチ・フォーラムは、テーマに沿って選抜された口頭発表を中心に据えて、論議を深めることを目的としています。また、美術教育学の直面している問題群や課題を示し、斯学の形成と発展を促すと共に、社会への発信の場となることを企図しています。

このリサーチ・フォーラムの目的や役割については既に学会誌21号に示していますが、ここで再度確認しておきたいことは「リサーチ・フォーラム」は、あくまでも学的な発表が中心であって、単なるシンポジウムや討論会ではないということです。そこでの論議はジャーナリスティックな意見表明の交換ではなく、口頭発表の内容に即して、美術教育学の問題意識を深めるための論議がベースであるべきだと考えています。またそれが美術教育学のアクチュアリティを高めることにもつながると考えております。

そのために、事務局では、テーマを公募するとともに慎重に検討し、今回は山木朝彦氏の提案に基づいてテーマを設定し、同氏をコーディネータに迎えて企画していただくことにいたしました。

テーマ 美術批評と鑑賞の問題

「批評」の意味と鑑賞教育の実践

日時 2000年8月25日(金)10時~16時頃

場所 ペンてる本社ビル14階会議室

東京都中央区日本橋小網町7-2

(地下鉄東西線又は日比谷線茅場町駅

下車新大橋通を北に徒歩約5分)
入場無料(非学会員の方も参加可能)
コーディネータ 山木朝彦(鳴門教育大)
発表者 菅 章(大分市美術館)

仲野泰生(岡本太郎美術館)
山木朝彦

中間総括 永守基樹(和歌山大)

総括 橋本泰幸(鳴門教育大)

司会 上山 浩(三重大)

時程 10時~14時30分/発表・質疑応答
14時30分~16時/全体討議他

問合せ先 〒514-8507 津市上浜町1515

三重大学教育学部 上山 浩

TEL/FAX:059-231-9280(直通)

E-mail:ueyama@edu.mie-u.ac.jp

テーマ設定の趣旨

山木朝彦(鳴門教育大)

美術教育を進めた美術批評家

戦後日本の美術教育の大きな運動である創造美育運動は、評論家の久保貞次郎によって、先導された。児童美術という考え方が定着した背景には、美術雑誌などを通じた久保の批評活動が大きな役割を演じたことは周知の事実である。『芸術による教育』によって一世を風靡したリードについても、同様に、彼の批評家としての側面を見逃すわけにはいかない。彼が美術批評家として数多くの評論活動を行い、辣腕を振るっていたことが、芸術表現活動の一環として児童の表現活動を位置づける彼の教育論を広く浸透させる大きな要因になっている。美術批評を行うということは、自ら美術に関する価値観を表明する場に身を置くということであり、美術に関する見識と思想が問われるという自覚に支えられた思索を行うということである。

批評家と教育者

美術批評はマスメディアを通じて啓蒙的活動を行ってきた点で、大衆に対する広義の教育的役割を担ってきた。美術の概念や歴史、そして作品の評価について言及するという行為は、批評対象をどのように見るかという見解の表明であると同時にどのように見たらよいのかというインストラクションでもある。

批評家は任意に作品を選び、美術批評の文脈で用いられる特定の言語を用い、対象を価値づけ、どのような見方が可能かを率先して語る。いっぽう、教師は鑑賞対象となる作品を精選し、鑑賞の学習内容を組織する。作品を掲示した教室に、あるいは展覧会場、野外彫刻展などに鑑賞者＝児童を誘い、芸術という次元に存在する作品の価値を教えるのである。教師は社会的に公認された[あるいは公認されるはずの]文化の伝達者として自己規定しているだけでなく、意識的・無意識的に自ら文化の枠組みに拘束されていることから、その発言は公共化された美をめぐる言語を用いるほかないのである。美術をめぐる、個人的・恣意的なコミュニケーションを図ろうと試みても、言語化の過程で公共化された美をめぐる言葉を用いる以上、教師は美術批評家と認識の地平を共有する。

変容する美術と教育の言説

美術批評はたえざる自己懐疑を本質とし、時代の流れに沿いながら過去の語意を修正し、編成し直すことによって、言説の体系化を図ろうとし、美術教育は現象を普遍的価値から捉え返そうと試みてきたが、両者は「美術」という価値を前提にしてきたのである。ところが、商品をイメージ化して市場を拡大し続ける現代の広告社会のなかで、そのありようはともに変貌を遂げようとしている。

美術批評について言えば、大量に流通しているジャーナルに載る批評文は、「ファッションの言説と美術ジャーナリズムのそれとは安易に合流し、その結果、現在ではこの二つはその『調子』においてしばしば区別できなくなっている(『現代美術の迷路』)とするヴィクター・バーギンの言葉を裏付けるよう

に陳腐なものになってきている。また、教育の世界で流通する言葉もキャッチフレーズ化の度合いを高めている。

これは、ともに、高度情報化社会＝消費社会の中で顕著になった現象である。美術批評と教育を複眼的に見つめることはこのような観点からみても重要であり、美術批評と美術教育、とりわけ鑑賞教育の関係性を論じる必然性があると言えよう。

関係性を検証する必要

美術教育と美術批評の影響関係を見ようとするとき、第一線で活躍した美術批評家の批評文の影響が美術教育の鑑賞に及んだという証拠を見つけることは難しい。戦後の美術教育を活性化させた民間の美術教育運動も、美術批評との関係性を表立って語ろうとはしなかった。さらに、表現領域を中心に美術の教科書が編纂されてきたことによって、美術の批評(文)が教育の場に入る余地はほとんど無かったといってもよい。

このように、美術教育に直接的な影響をもたらした痕跡を探し出すことは難しいが、美術批評と美術教育の関係を顕在化させてみる必要があるだろう。なぜならば、美術運動にたいする美術批評の方向付けや意味づけの力が少なくとも戦後の日本の美術界では大きかったからである。美術作品を対象とする鑑賞教育を構想するとき美術批評は避けては通れぬ領域なのである。同時に、現代の高度情報化社会のなかでの美術批評の役割と鑑賞教育の可能性についても考えてみなければならない。

これからの鑑賞教育の実践のために

以上の認識に基づき、日本の美術批評がもたらした美術運動に対するものの見方や価値付けを今一度整理・検討し、わたしたちが鑑賞の教材を開発・編成するさいに、これらをどのように相対化して見るべきかを整理して考えてみたい。また、鑑賞の教材の開発や編成のために美術批評をどのように役立てるかという実践的な課題に応える。

パフォーマンスやキッシュとのかかわりで「ネオ・ダダ」など戦後日本の美術運動につ

いて詳しい菅 章が、批評活動と教育普及活動の関係について論じ、岡本太郎という批評家的資質に恵まれた芸術家について詳しい仲野泰生が、表現と鑑賞の関係に焦点をあてた発表を行う予定である。両者とも、学芸員の立場から批評と鑑賞教育のかかわりについて、具体的な事例を交えて研究発表を行うだろう。日本の美術批評の整理・検討と鑑賞教育の方法論の整理と展望については、山木が発表を行う。また、今回のフォーラムでは、教育実践のための方法論を参加者とともにディスカッションする場を用意する。この目的から研究発表後に問題点の整理を永守基樹が行う。最後に、比較文化的な観点から橋本泰幸が総括を行う。

学会誌について

学会誌編委員長 柴田和豊

最初にお詫びを

この3月に刊行しました『学会誌21号』の奥付部に間違いがあります。校正時の行き違いから、学会本部事務局と編集委員会所在の大学名が違っていています。学会外の関係機関には刊行時点で、また学会内には3月の学会総会で報告し、お詫び致しましたが、ここで、あらためてお詫びいたします。

十分に注意しながら刊行作業を進めていたのですが、今回から印刷所が変わった関係で、最後に思わぬミスが出てしまいました。お許し下さい。対応策としましては、**奥付の修正シールを同封**しましたので、御面倒ですが、会員各自でお貼り下さい。

本年度投稿締め切り日

来年3月刊行予定の『学会誌22号』への投稿締め切りを8月30日(水・必着)と

させていただきます。これによって「夏休みを執筆期間にあてることのできるような締切日にしてほしい」との多くの会員の声にお応えすることができます。

投稿される方は、〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1- 東京学芸大学美術学科「柴田研究室」宛で、御郵送下さい。

執筆要項が必要な方は、御請求下さい。研究室直通電話は、042-329-7608で、メールアドレスは、<kshibata@u-gakugei.ac.jp>です。

あるいは、既刊の学会誌を参考に、A4版1頁43字×36行で作成した原稿(基準頁数は10頁)をお送り下さっても結構です。論文の形式的なフィニッシュは掲載可否の出た後でも間に合いますので。但し、その場合には、投稿時に論文3部、論文返送用封筒(宛名を明記したもの)連絡先と連絡手段を明記したメモを必ず同封して下さい。

文部省学会誌補助金について

ここ数年支給されていまして文部省の学会誌刊行のための補助金(例年約50万円)が、今年度は受けられなくなりました。昨今の経済状況からして、このような事態は予想していたのですが、現実の問題として、学会誌刊行のための財源について再検討せねばならなくなっています。頭の痛いことです。来年度以降も、3~5割は英文論文を含むような構成にしない限り、補助金は受けにくい状況にあります。御承知おき下さい。

Mail Box

このコーナーでは、会員の方々からの便りを掲載します。学会や美術教育に関するご意見等をお寄せください。

『教師をめざす若者たち』(プレジデント社, 2000)

- 非日常の中で見る自分の背中 -

大橋 功 (佛教大学)

不登校、学級崩壊、教師の破廉恥事件など、明るい話題がなかなか見られない最近の教育界。そんな中であって、『教師をめざす若者たち』は尾を引く事が無い。大学の授業で話に食い入るように集中し、図画工作の演習にきらきらとした目を輝かせる学生たち。しかし、現実の壁は厳しく、なかなか正採用には至らないこのご時世。一方、採用されればされたで、一年もしないうちに「こんなはずじゃなかった。」「自分は教師に向いていないのではないか」などと弱音を吐いてくる。しかし、それも彼らが不甲斐ないわけでもない。何しろ、教育困難校からの転出希望が殺到し、逆にそこへの異動は、あの手この手の理由をつけて回避しようとする現職教師たち。そんな職場へ有無を言わず新採用者たちを安易に送り込んでしまう。こんな実態が、多くの、将来有望な若い教師たちをつぶしていった。

教育の現場に出て、そんな環境に置かれても、なおつぶされる事の無い学生を育てなければ...と考えるようになったのは、つい最近の事でもある。いったい、今の大学における教員養成のシステムが、どれだけ彼らの資質を高める事に寄与できているだろうか。自分自身への反省も込め、その打開策を自分なりに求めてきた。教員養成課程といわれる制度もしかり、大学のカリキュラムもしかり。オ

フィシアルな制度改革を待っているのは、今日の前の学生たちに申し訳ない。

そんな、思いをくすぶらせていた今年の春、思いも寄らぬチャンスが到来した。「中国の僻地にある小学校で学生たちに授業をさせてみないか」はじめは、戸惑いが無かったわけではない。しかし、言葉の壁やまだ見ぬ異国の地で授業に挑戦するという「非日常」が、学生たちに、これまで見る事の出来なかった彼ら自身の「背中」を見させることになるのではないだろうか、と期待した。

教える事で初めてつかんだ教師の自覚

1998年、佛教大学で開かれた平山郁夫展がきっかけとなり、平山さんの寄付で建てられた敦煌郊外の新店台村小学校での教育ボランティアが計画された。日本の教師の卵たちが、9月上旬新学期の小学校で4日間教壇に立つ。彼らは、訪問までの数ヶ月間、子どもたちが心から楽しめる授業を目指して試行錯誤を重ねていった。メンバーは、美術教育を学ぶ私のゼミの4回生を中心とした有志たち。教員採用試験を控え、卒業研究にも取り組まねばならないこの時期に、あえて、この教育国際ボランティアをぶつけてみた。訪問までの





4ヶ月間、彼らにとっての非日常の日々が始まった。和風、人形劇、折り紙、大なわとび、そして音楽……。盛りだくさんのプランを実現させるために、時には激しくぶつかり合う場面もあった。そんな、彼らのそばにいて、「この経験こそが、真に『教師』としての自覚を育てるのだ」と確信できた。私は、これほどまでに彼らが短期間に成長し変容するとは正直予測できていなかった。傷つきやすく、なかなか自分をさらけ出せないでいた彼ら彼女たちが、いつのまにか、あるがままの自分をさらし、お互いを受け容れあうようになっていった。根拠の無かった自信は、確信へと変わり、見えないものへの不安は、想像する楽しみへと変わっていった。それぞれの思い込みや誤解によるぶつかり合いは、価値観の共有へと昇華されていく。

9月、彼らは敦煌の小学校の教壇に立った。言葉の壁、教育のありかたや生活習慣の違い、様々な「違い」が立ちはだかる中、あらゆるコミュニケーションの手段を駆使して授業に挑んだ。子どもたちの目がきらきらと輝きを増し、はじめは疑心暗鬼だった中国の若い先生たちの目にも輝きが見えてとれた。「子どもたちが変わってく」驚きと戸惑いの中、中国人

の教師が語ってくれた。「教師になった最初の思いが蘇ってきた」と。

シルクロードの大空に和風が舞い上がり、子どもたちの歓声が沸き起こる。校舎に響き渡る「上を向いて歩こう」の歌。中国の子どもたちと、心で語り、心で通い合った4日間。彼らは、教師という夢を追い求める自分を再発見していた。私は、そこに、安っぽいドラマ以上の人間の物語を見つけることが出来た。敦煌から帰ってきたメンバーのひとりが語ってくれた。「これまでは、教師になることが目標だった。でも、今は、教師になって何がしたいのかという目標が変わった」と。今春卒業した9人の内3名が教員として採用された。さらに3名が講師として勤務している。しばらく途絶えていた彼らからのEメールが、少しずつ届くようになった。今日届いた、三重県の小学校に採用された木下幸子からのメールには昨日、NHKのドキュメンタリーが再放送された事について触れて、次のように記されていた。「再放送見ました。学生の間は正直、自分の言った言葉が軽薄のように感じ、放送以降、大学で流れていても直視できなかったけど、職場に出た今見て、自分がこの仕事に対して感じた気持ちを忘れてはいけなかったと思います。」

彼らに続く、新4回生たちが動き出した。ゼミの仲間の台湾からの留学生が、母国の震災にあった街「埔里(プーリー)」へボランティアに行くというのを聞いたゼミの仲間たちが、それならと名乗りをあげた。総勢14名。震災後、復



旧しつつあった街を2月中旬に土石流が襲った。人々は再び襲った災害に気力を奪われ失望しているという。そんな中で、子どもたちの心のケアの問題が深刻だという。「子どもたちと楽しく交流する事こそが励ましになるのでは」と今、様々な企画に取り組んでいる。

特に、京都市内の小学校や自分たちが実習でお世話になった学校、そして先輩たちのいる学校にお願いし、台湾の子どもたちを励ますメッセージをイラストと共に送ろうという計画が進行している。簡単な励ましのメッセージを中国語で表したプリントや、現地の様子を写した写真などを資料として、小学生たちが心をこめてメッセージイラストを書いている。いくつかの小学校では、授業として、学生たちを招き、呼びかけと説明をする時間を取ってくれている。学生たちも、大喜びで、授業の工夫をして学校へ出かけている。

最終的には1000枚以上のメッセージが届けられる事になる予定だ。海を越えて、子どもたちの友情のメッセージが、届けられる。

子どもたちの交流に、「イラスト」が、言葉の壁を越える大きな意味を持つ。

現地では、紙飛行機、瓦礫や石にアクリルペイント、似顔絵交流、そして音楽による交流と様々である。

5月7日から16日まで、台湾の美術教育界の友人たちの支援も待ってくれている。

敦煌に続いて、今度は台湾。学生たちの行動力と創造力が海を越えて大きく花開いてゆく。そこに、美術・芸術という媒体が大きな役割を果たしてゆくことになる。

大学の通常の授業が大切であることは言うまでも無い。しかし、私たちは、彼らがどんなことに夢や希望を抱き、何に悩み、そしてそれをどう乗り越えて行こうとしているのか、知る事は難しい。にもかかわらず、「最近の学生は...」などとぼやいている。少しのチャンスを与えれば、これほど素晴らしく成長する若者たちなのに。せめて、彼らの「尻に火をつける」のではなく、「心に火をつける」刺激的な授業をしなくてはならないと感じている。



書評&文献紹介

グレアム・ターナー(溝上由紀他 訳)『カルチュラルスタディーズ入門 理論と英国での発展』(作品社, 1999) など

三浦浩喜(福島大学)

まだ中学校現場で働いていた頃、多くのツッパリ生徒の攻勢に悩まされ続けた。粘土で火災報知器を集中攻撃する、けんかして彫刻刀で相手を切る、チューブから飛び出した絵の具で自動車をペイントする……、ありとあらゆる事が美術の授業中に起こった。

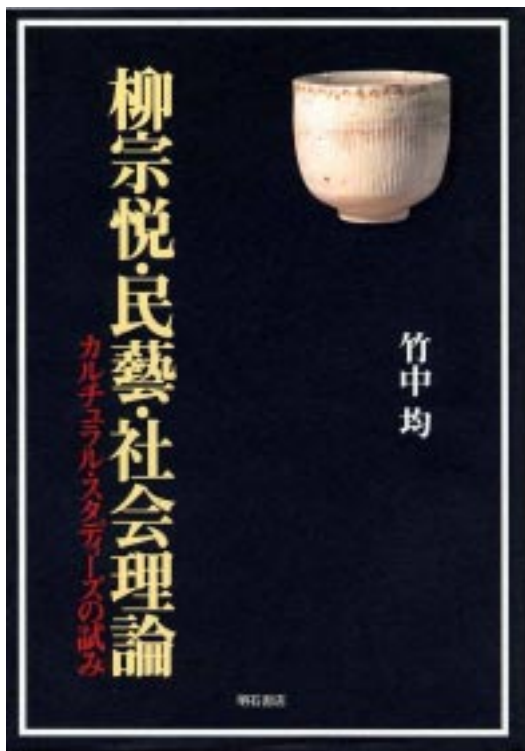
「こんな生徒たちに美術を教えて何になる？」事件のたびに自分に問うた。しかしこの疑問は数年後、指導が通るようになってからもずっと問い続けてきた問題であった。

確かに美術教育の「教科書」には、造形活動が彼らの発達におよぼす影響が事細かに書かれてはいる。では美術教師が生徒たちに門前払いを食わされた場合どうなるのか。いや、美術教育の本質的な問題は、生徒文化と美術という文化の客観的位置関係の問題ではないのか、そのようなことをずっと考えてきた。たとえば、「異装」と呼ばれる彼らのツッパリスタイルがあった。彼らが学校に反抗する気持ちは分かるし、多種多様な言い分もわかるのであるが、どうしてこうも見事に短ラン・ボンタンスタイルに収斂してしまうのだろうか。そのスタイルが彼らの旗印かと思いきや全然関係のない普通の生徒も異装を繰り返す。当時は、要するにそれが店に売っていて彼らが手を伸ばせば届くところに彼らの文化圏が

横たわっている、つまりは、消費文化の問題で片づけていた。

この問題の糸口が見え始めたのは、ポール・ウィリス（熊沢誠他訳）の『ハマータウンの野郎ども』（筑摩書房、1985）を読んだときだった。学校に反抗的な態度を繰り返す生徒たちのライフスタイルは、下層労働者階級の文化をコピーしたものだというわけだ。なるほど、彼らはバイクやクルマに興味を持ち、竜や虎の刺繍の入ったグッズを好み、「同業者」間の連帯もきわめて強い？ 気っ風のいい太鼓が好きで地域のさまざまなところに根っこを張っているのも下層労働者階級のそれであろう。

ウィリスが名を連ねる、イギリスのバーミンガム大学を中心に広がりを見せいているカルチュラル・スタディーズ（CS）が90年代に入って日本にも輸入されるようになり、文化と政治の問題が同じ土俵で議論することが可能になった。筆者がCSの名前と顔が一致したのはここ2年くらいである。最近出された竹中均『柳宗悦・民藝・社会理論 カルチュラル・スタディーズの試み』（明石書店、1999）



竹中均『柳宗悦・民藝・社会理論 カルチュラル・スタディーズの試み』（明石書店、1999）



G・ターナー『カルチュラルスタディーズ入門』（作品社、1999）

では、西欧にとって「オリエント」とは何だったのかと同じレベルで、知識人にとって「民藝」の発見とは何だったのかを、斬新な角度から考察している。これを発展させれば、美術教育にとって児童画の発見とは何だったのかを全く新しい側面から記述することも可能になる。

標記のG・ターナーの『カルチュラルスタディーズ入門』（作品社、1999）は、横断的で「とらえどころのない」CSを、「入門書」としてまとめた野心作である。英国における素朴な文化批評から始まったCSが、言語学や社会学、記号学、フェミニズム、エスノグラフィーなど、多くの領域を取り込むことによってきわめてアクチュアルな実践力を持つ学問に発展するまでがわかりやすく記されている。

美術教育を広範な文化論へと結びつけることは、教科の立脚点を曖昧にし、徹底的に相対化させる危険性を持つが、美術教育実践を分析する際、新たな視点を与えてくれるだろうし、学校における実践の新たな地平を開いてくれるものと思われる。

情報発信コーナー

平成11年度科学研究費採択課題について
学会通信36号掲載「平成11年度科学研究費
補助金採択課題」に漏れがあり、連絡いただき
ました。大変失礼いたしました。以下のとおり
です。

< 基盤研究(C) > 新規分

渋谷寿：課題名 キャンプクラフトにおける
子供の創造能力育成の為にプログラムおよび遊
び媒体の開発、配分額 220万円

なお、**渋谷寿氏(名古屋女子大学)**は、科
研費を利用して、「平成11年度は米国出張で、
チルドレンズミュージアム、インディアンのもの
づくり、玩具の現状等の調査」を行われました。
しかし、米国の野外教育でのものづくりの
情報は、断片的情報しか入手できなかったそう
です。米国の野外教育におけるものづくりや造
形教育を研究していらっしゃる先生方との情報
交換を希望されておられます。

大橋 功氏(佛教大)

自著『教師をめざす若者たち』プレジデント
社刊の関連で、「朝日新聞4月2日読書ページ『ベ
ストセラー快読』橋爪大三郎氏による書評」、「N
HK総合テレビ全国放送での再放送 列島スペ
シャル「子どもたちに伝えたくて 放送日、4月
21日午前1時50分」の案内をいただきました。

氏の活動力には、驚くばかりですが、今また、
大橋ゼミの新4年生10名プラス有志が「台湾震
災復旧&子どもたちを励まそうボランティア」を
計画・実行中だそうです(10~12頁参照のこと)。
春日明夫氏(東京造形大)

「世界のアーティスティックな木の玩具 春日
明夫マイコレクション展」会期4月24日~30日
の案内をいただきました。世界18カ国約150点
の木の玩具の展示を中心に、小中学生や春日氏
自身制作の木の玩具の一部、『研究冊子』を展示・
発表されました。

鹿田淳史氏(京都)

「第10回芸術祭典・京」の中の企画公募展「京
を創る」会期5月12日~21日の情報をいただき
ました。世界文化遺産の醍醐寺で展示され、全国
から応募のあった261点から選ばれた8名の作
家のうちの一人が鹿田氏です。

今回は、年度末・年度始めということもあっ
て、会員の多様な活動の報告をいただきました。
会期の前にお知らせできないのが、残念ですが、
記録として掲載いたしました。

また、今年度の科研費の内定も出たようです。
研究区分、課題名、研究代表者、配分金額、新規・
継続の別などをお知らせください。

さらに、科研以外の補助金を受け取っての、研
究プロジェクト、企画などを推進されておられ
る方、会員の励みにもなりますので、是非とも情
報をお願いいたします。(受け取り宇田)

先日、フェルメールの作品を含む17世紀オラン
ダ絵画を集めた二つの展覧会を見る機会がありま
した。展覧会に因んで新聞・雑誌で取り上げられ
たり、フェルメールに関する一般書が相次いで
出版されるなど、ここ数年フェルメ
ールへの関心が高くなっています。

三百数十年を経ているにも関わ
らず輝きを失わない色彩、同時代の作
品と比べても抜きん出た質の高さ、作品
の多くが市民の日常生活を描いた風俗画であるこ
と等々が人気の秘密でしょうか。

今回フェルメールの作品を目の当たりにして感
じたことは、それらがカメラのレンズを通してと
らえたイメージ(写真)と酷似していることです。

人物よりもむしろ周囲の事物に合わせられたかの
ようなピントや微妙なピンボケ具合など、写真の
イメージに驚くほど近いのです。

こうした作品を図工や美術の授業で取り上げる
としたら、今日の子どもたちにとって
は、身近な写真と比較しながら鑑賞
する方が分かりやすく親しみやすい
かもしれません。

それにしても、フェルメールの作品を
味わい楽しんでいる人々にとって、小・中学校、あ
るいは高校での美術教育はどのような意味を持っ
ているのだろうか、美術館を後にカラオケの演歌
が響く夕暮れの天王寺公園を歩きながら、ふとそ
んな思いが頭をかすめました。(新井)

編集後記